



創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp/
発行所 公益財団法人 東京YMCA
発行人 菅谷 淳

東京YMCA



2021年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

年頭所感

今、求められること

コロナ禍の年明けに

心の距離 離れぬよう



公益財団法人東京YMCA
評議員会会長/日本キリスト教団早稲田教会牧師

古賀 博

昨年のクリスマス、わが家の居間にはかつてないほど多くのクリスマスカードが飾られました。例年交換している友人たちのものに加えて、教会員からのものが多数。そこに記されたメッセージに触れて、実に温かな想いを与えられました。奉仕する教会では、三月末より無会衆礼拝を選択し、教職二名とネット中継奉仕者の数名が集う状態へ。七月から会衆の受け入れを始めましたが、奉仕者を除くと会堂

の関わりを保ちましよう」と語られたと聞いています。フィジカル・ディスタンス(身体的距離)を保たねばならない現在。しかしその分、心や想いの距離は以前よりずっと近いものにと願ひ、為し得ることの模索を教会では続けています。YMCA活動においても、課題はきつと共通していることでしょう。届いた多くのカードは、関係継続の祈りの証と受けとめています。これまでのような対面や触れ合いは今難しいとしても、人と関わりたい、多くの人のそんな切実な想いを受けとめ、それに応えることのできる活動を作り出していく、そんな二〇二一年にしたいと願っています。

変えるべきものを変えて



公益財団法人東京YMCA
代表理事・総主事
菅谷 淳

新年あけましておめでとうございます。昨年は新型コロナウィルスに振りまわされた一年でした。感染予防に努めながらも、いつかは自分も感染するかもしれないという恐怖に怯えながら、コロナ以前は想像すらしなかった非日常が新しい日常に代わっていくやネットにはコロナ関連情報やニュースの特設コーナーが設けられ、感染者数や重症者数が毎日報告され、一喜一憂しながら

ことが最も重要です。その上で、もしコロナ前に戻れるなら、それはそれでプラスと考え、自らをまた変化させていけばいいと思います。新しい年を迎え、東京YMCAは新年度の計画を立てる時期にきています。コロナ危機が長引いていることで差別や偏見、格差や貧困、心の病など、様々な困難や課題が増大しています。その中で人々が真に求める安全で安心できる社会づくりにYMCAが果たすべき役割は何か、そのために自らをどのように変化させたらよいか、会員と職員で力を合わせて知恵を絞り考えていく年にしたいと思っています。今年も東京YMCAをよろしく願います。

社会の在り方 問い直して



学校法人東京YMCA学院
理事長

若槻 史郎

本年は一昨年からの発生した、新型コロナウイルスの感染拡大による、世界的なパンデミックの

々のほとんどが、初めてといえる体験であり、地球上のあらゆる国々、場所、老若男女、貧富の差異なく与えられた試練といえましょう。私たちは、ここで今までの価値観、生き方、社会の在り方を今一度問い直す大きな転換期を迎えたいと思います。それぞれの個人のレベルで、所属するコミュニティや社会

システムの中で、今起きている新たな出来事を注視すべきは、このパンデミックが社会的弱者や弱い社会構造、システムに、集中して災いや困難をもたらしている事実です。罹患した人の痛みはもろろのこと、医療従事者の苦渋、職を失い、住まいを失い、食糧不足をきたす人々など、絶望の最中にいる人々の

ことを思います。国の為政者、企業や団体、地域のリーダー達の施策が、経済優先主義や自国第一主義に陥ることには許されません。これまでの経済中心主義による幸せの指標はことごとく疑いつつ、一人一人の命を最優先する「生存権」のあるべき姿を追い求めていく時と考えます。

私たちが学校法人東京YMCA学院は三つの施設において、幼き園児から、介護福祉士・作業療

「我、山に向かいて目を仰ぐ」。悩んでいたときにある人から言われた言葉である。その人は日頃から「お互いに見つめあうのではなく、リフトに乗るように同じ方向を見て前に進む」と良く言っていた。うなだれて足元を見るのではなく、自然の中に身を置き、顔をあげて前を見つめ、ゆっくりと確実に進むことの大切さを教えられた気がした。今でも私は何かあると黙って山や空を見上げる。すると不思議と心が穏やかに落ち着くのである。▼コロナ禍の医療従事者へ敬意をこめて、ブルーインパルスが空を舞った。「予算の無駄遣いではないか」と批判もあったが「上を向いて元気になってほしい」という願いの中で実施された飛行の瞬間、医療従事者でなくても上を見た人、元気をもらった人は少なかつたであろう▼YMCAの様々な活動も「何のために」「どんな願いを持って」行うのかを明確にし、力を合わせて前に進んでいくことが大切である。直接的な人との繋がりが制限される状況ではあるが、足元のハイドルだけでなく、「想い」を共にし、前を見つめて着実に歩んでいく年にしよう。白い山を見上げてそんなことを考えた。(芝浦学童クラブ施設長 江尻明子)

児童精神科医が語る

心を育てる コミュニティーの力

田中 哲 さん

子どもと家族のメンタルクリニックやまねこ院長。専門は児童思春期精神医学、児童虐待の臨床、発達障害。北海道大学医学部を卒業後、同大学医学部精神科に入局。札幌市立札幌病院静療院児童部、北小田原病院副院長、東京都立梅ヶ丘病院精神科部長・副院長、東京都立小児総合医療センター副院長などを経て、現職。一般社団法人日本児童青年精神医学会理事・倫理委員、社会福祉法人子どもの虐待防止センター理事などを兼務。



「子ども一人を育てるには 村が丸ごと必要である」

(アフリカのことわざ)

児童精神科医で、日ごろから東京YMCAのスタッフ研修などでもご指導くださっている田中哲さんに11月、子どもたちを取り巻く状況について講義をいただきました。ご紹介します。

子どもの成長に必要な条件とは

私は約40年にわたって児童精神科医をしていました。この間に医学は進歩し、また少子化も進んで小児科の患者は減ってきましたが、子どもの心の病は増える一方です。なぜなのか。そもそも子どもの心が順調に育つていくためには何が必要なのか考えてみました。



図1 子どもの心の育ちに悪循環が生じた図

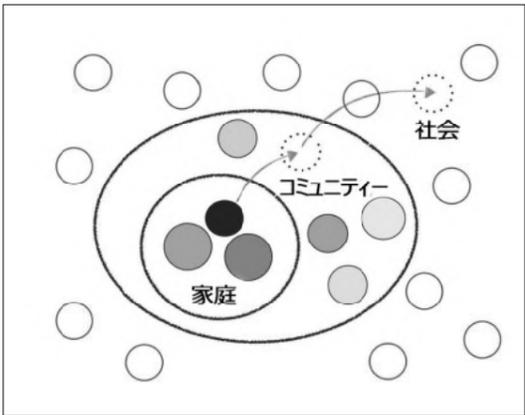


図2 「コミュニティとその機能」 子どもたちは家庭からコミュニティを経て、見知らぬ人のいる社会に出て行く。

必要な条件はいくつかありますが、まず大事なものは、子ども自身がもっている潜在力です。ロケットでいえばエンジンですね。その力を邪魔しないように、しっかりと射撃台、つまり育ちに必要な環境を整えてあげれば、子どもたちは多少のアンバランスを乗り越えて社会へ飛び立つことができます。その条件となるのが、①心理的に安定した家庭養育、②子どもの育ちを支えるコミュニティ、③子ども集団の自尊心(自己肯定的な子どもの集団)だと私は考えています。少々抽象的な概念ですが、これらが

子どもが陥る負の連鎖

たとえば虐待など、家庭が心理的に不安定な場所になると、子どもたちは対人関係や社会性に困難をきたすなど、愛着障害をおこします。最近、発達障害の子どもが増えています。発達障害が遺伝に規定される疾患であれば急増といったことは起こりえませんが、急増には養育環境が大きく影響していると考えられます。また子ども自身も

自己肯定感をもてない、つまり自分たちはそこそこ上手くやっているという「子ども集団の自尊心」が失われると、子どもは自分も他人も受容できなくなり、仲間はずれやいじめが起きやすくなります。「僕らはあんなヤツとは違うよね」と排除することによって自分たちのプライドを保とうとするわけです。排除された子どもたちは居場所がなくなり、集団不適応や不登校がおきます。さらに「育ちを支えるコミュニティ」が機能しないと、子どもたちは反社会的な行動をとるようになります。自傷行動や薬物依存、非行、反抗など、大人の手にも負えないような問題行動を起こして、自分たちを認めてくれない社会に対してSOSを発信する。社会に対する異議申し立てをするようになります。

解決には社会全体の力が必要

これらの問題は、私たち児童精神科医がずっと向き合っていることなんです。30年も40年も、どんなにやっても減っていきません。みんな根っこがつかない問題だから減らないんです。同じ耕や狩猟をしてきました。そして子育てでもまた、集落の大事な役割の一つに位置づけられていたのです。結婚式にはコミュニティの人を呼び、そこに生まれた子はコミュニティで育てる。皆で子育てを引き受けるわけです。

一人の子を村全体で育てる

アフリカのことわざで、「一人の子を育てるには村がまるごと必要である」というのがあります。一人の子どもが育つためには、村人全員に何らかの役割がある。関係のない人はいない。コミュニティ全員で育てて初めて子どもは健康に育つという考え方は、

コミュニティが培う社会力

ところで子育ての最終的な目的は、子どもを社会に送り出すこと、一人立ちさせることです。そのためには、社会という知らない人たちの中で自分を主張し、居場所を見つけて自立していく力が必要になります。その力はコミュニティの中で培われるのであって、家庭の中で身につけられるものではありません。

学校が唯一のコミュニティ

今、コミュニティが力を落としてしまっている中で、学校が独占的にその役割を負う結果になっています。子どもたちは学校で人間関係を学び、社会へ出て行く練習をする。学校がコミュニティの役割の全部を負っている状況です。

子どもたちは、家庭からコミュニティに出てきて、そこで社会に出ていく練習をするので、公園に行つてほかの子どもと遊んでみる。近所のおじさんに「そんな所で遊んじゃダメだよ」と叱られる。そういう社会と家の中間にあるコミュニティ、それがないと子どもは社会に出ていく力を身につけることができません。またコミュニティは、コミュニケーションを学ぶ場でもあります。最近、コミュニケーション障害の子どもの数が増えていますが、本来コミュニケーションはあえて学ぶものではないです。コミュニティの中で人間関係を築き、居場所、馴染める場所を作る中で学んでいくものです。

私はその思うに至りませんでした。飛び立てないままとなり、形だけでも自立しようとして家を出ることもありますが、そこで未婚出産などがおきればさらに困難な状況に陥ってしまいます。その不安定な家庭で生まれた子どもはうまく育たず、負の連鎖になっていきます。

現代はというと、人はたくさんいるし、世界中とつながることもできるけれど、絆を感じられない世界は狭くなっています。たしかに地縁や血縁、趣味の仲間など、人はいろいろなコミュニティを作っていますが、よその家の子どもと一緒に育てるような関係はありません。チームで子どもを育てることがなく、よその家の子どもには関わらない。子育ては各家庭で担います。核家族や一人親家族ではその負担を受け止めきれない状況がおきています。

でも、学校に合わない子っていうのは当然あるわけです。昔からいた。学校に行けない子が普通にいる以上、学校に行けないことがマイナスの履歴になっちゃいけないんです。学校以外のコミュニティが豊富にあつて、学校に行かなくても大人になつていける社会こそが必要です。学校に行かない子どもやその家族は、自分たち

東京町田YMCA 30周年 会員の力で 歩み続ける



設立30周年を迎えた東京町田YMCAが12月14日、町田市民ボランティアセンターを会場に記念式を行い、永年にわたり貢献されたボランティア12人を表彰しました。

権藤徳彦さん(後列右端)
富樫紀代美さん(前列右端)
小林陽子さん(前列左2番目)
菅谷淳総主事(前列右2番目)

東京町田YMCAは1990年に英会話スクールやキャンプなどを行う地域センターとして開設されましたが、英会話事業の撤退により2003年から職員も会館もありません。以後は会員とワイズメンスクールの力により、小学生対象の「わくわく！科学実験教室」や高齢者のための「歌声ひろば」など地域プログラムを継続しています。中でも中高年のボランティアを養成する「ペテラティア・フォーラム」は

1994年の開始以来、毎年ボランティアを養成し続けており、YMCAを始め地域のさまざまな団体に人材を輩出しています。当日は、新型コロナウイルスの影響により大勢で集まることはできませんでしたが、ペテラティア卒業生を代表して富樫紀代美さんと小林陽子さんに東京YMCA総主事より感謝状が贈呈されました。さまざまな変遷を重ねた東京町田YMCAですが、30周年を迎えたことに感謝し、これからも地域に根差した活動を継続できると、関係者一同誓いを新たにするとともに

- 「日本YMCA同盟表彰」**
東京から36人が受賞
- 日本YMCA同盟では2年に一度、YMCAのために永くご奉仕くださっている方々を表彰しています。東京YMCAからは今年、左記の36人が選ばれました。コロナ禍のため表彰式は行えませんが、感謝してご報告します。(敬称略 アイウエオ順)
- 【青少年奉仕賞】 浅見隆夫 香取良和 寺門文雄
 - 【50年継続会員賞】 浅野良憲 篠宮邦明 山田利三郎
 - 【25年継続会員賞】 有田士朗 神谷邦子 菅野一雄 黒田景子 小菅奎申 五味宣子
 - 小宮恭子 権藤徳彦
 - 近藤益徳 佐久間春枝
 - 桜井佳代子 桜井源一
 - 佐々木正 笹本道夫
 - 塩田瑞代 杉野正
 - 添田昇 東矢高明
 - 中内俊一郎 中内秀子
 - 中奥彰子 中島三三子
 - 半沢照代 平本善一
 - 堀 清子 増野 肇
 - 松谷健一郎 宮嶋裕文
 - 柳田 彰 山本俊正

子どもを育てる コミュニティ

実は自身は、自分が子育てをしていたころには、このようなことはまったく考えたことがありませんでした。今思えば、所属していた教会に同世代の子どもたちがたくさんいたこと。その後、教会で「子育て広場」を主催し、教会に関わりがない人も大勢集まっていたこと。我が家の子育ては、「違う」ことによって自立のチャンスを得たこと。多層的な、平等な社会になっていくべきです。

「子育てサークル」が作られています。主に乳幼児の子育てを目的に、課題や時期を限定して繋がっている集まりですが、子どもの育ち全体を考えると、もっと継続性のあるコミュニティのあり方を考えていかなくてはならないのではないかと私は思っています。子育て中の人だけではなく、さまざまな人たちが子育てに参加できるようなコミュニティが必要です。子どもの育ちを大切にしていることが、具体的な形として見えるようなコミュニティのあり方を探っていくこと。子どもたちの心を育てる力をもったコミュニティを作っていくこと。それが、さまざまな問題を根本から解決し、現代に必要とされている新しい子育て文化を作ることになるのではないかと考えています。(まとめ・広報室)

医療従事者へ感謝をこめて

しののめYMCAこども園 園児が病院にプレゼント



しののめYMCAこども園では毎年、クリスマス礼拝で集められた献金をさまざまな団体に届けていますが、今年は新型コロナウイルスで大変な状況にある医療従事者を励ましたいと考え、昭和大学江東豊洲病院に贈りました。

12月16日(水)、手作りのクリスマスオーナメントとお手紙を添えて、年長児18人が病院を訪問。病院では、副院長先生や看護師、事務局のみなさまが出迎えてくださいました。子どもたちが「私たちが病気になるよう、がんばります！」とお伝えすると先生方は「しっかりと手洗いうがいを忘れないようにしましょうね」と話してくださいました。感染が拡大する中、園児たちは医療従事者の大変さを知るとともに、自分自身で健康を守っていく必要や命の大切さを実感する機会になったことと思います。再度感染拡大する中、一日も早い収束を願ってやみません。(園長 堀江和広)

キッズガーデン園児が 国際協力募金活動

街頭募金の代わりにポスターを掲示



コロナ禍で恒例の街頭募金活動が中止となった代わりに、東陽町のキッズガーデンでは近隣の施設に募金のポスターを掲示いただき、広く地域の方々に募金を呼びかけました。

園児たちは事前に、集めた募金が Bangladesh YMCA など遠く離れた国の人の役立つことを学び、また募金にご協力いただいた方に差し上げる手作りのプレゼントも作成しました。こうした活動とおして園児には、世界にはさまざまな困難をかかえた子どもたちがいることを知り、助け合う大切さを知ってほしいと願っています。(東陽町語学教育センター 李善姬)



救済物資の配布を待つ人たち (ピリシリYMCA)

2020年7月に Bangladesh を襲った洪水による被災者救援のため、東京YMCAは昨秋、皆さまからお預かりした国際協力募金の内3000ドルを Bangladesh シュ YMCA 同盟に送金しました。現地では新型コロナウイルスの感染拡大もあり、被害は深刻なことから、Bangladesh YMCA はさまざまな団体からの募金をもとに救済活動を行っており、11月までにボグラ地域500世帯とピリシリ地域300世帯に、食料(米、豆)、経口補水液、マスクを配布したと報告がありました。日ごろ募金ご協力くださった皆さまに感謝しますと共に、引き続きのご協力をお願いします。(国際部 戸坂昇子)

支援報告

Bangladesh へ送金、洪水被災者へ救済物資

シリーズ
資料室の窓から(110)
創立200年を待つ
会員・西森末次郎
本会元副総主事 齊藤 實



「創立200年祝典で開けられたし」と記された封筒と、作成者のハッピーこと西森末次郎さん。

創立140年を過ぎたばかりなのに、早くも東京YMCA創立200年記念祝典の日の話をしたい。会員で成り立つYMCAとして、記憶し続けたいひとりの会員の切なる「願いごと」だからである。東京YMCA創立百周年記念式典が行われた1980年5月17日に彼は小さな紙包を遺した。「創立200年祝典で開けられたし」と記されたものである。包の作り手は、西森末次郎。関東大震災からの復興で意気上がる東京YMCAで英語社交会(ESS)幹事となったと伝えられた。基督教文学研究会幹事としてイギリスの詩人テニソンの「インメモリアム」も学んだ。1931年2月1日には東中野の新生基督教会で夫人とともに白戸八郎牧師から受洗。東京YMCA創立百年の式典に参列したときは、83歳の彦根ワイズメンクラブ会員であった。東京江東クラブが1986年に発行した『ワイズギネス』誌は「最も長持ちした夫婦第一位」に「西森末次郎・キリ夫妻」の名を挙げて結婚62年を祝った。彼が寄せた小文に、東京の京華中学2年が終わる時、「2円の月謝と校友会費3円払えず退校」とある。また「東京(YMCA)でのESSの20年、あばれた、あばれた。ハッピーはESSが付けてくれた。1946年戦後の初選挙で彦根市議員となる。そろって90才までと夢のような希望」とも書いた。ハッピーさんを知る私としては、東京YMCAは彼の願いをしっかりと覚え続けてほしいのである。せめて5年置きには、この紙包みの存在を思い出して欲しい。